

## 1 自己評価及び外部評価結果

## 【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4076200403		
法人名	地域福祉研究所株式会社		
事業所名	グループホームえだくに		
所在地	福岡県飯塚市枝国439番地		
自己評価作成日	令和3年9月6日	評価結果確定日	令和3年11月17日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。

基本情報リンク先	<a href="http://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/40/index.php">http://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/40/index.php</a>
----------	---

## 【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	株式会社アール・ツーエス		
所在地	福岡市南区井尻4-2-1	TEL:092-589-5680	HP:https://www.r2s.co.jp
訪問調査日	令和3年9月30日		

## 【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】(Altキー+enterで改行出来ます)

施設の理念のもと、地域に根差した施設運営を行っている。近年では、新型コロナウイルスの流行により、地域の行事等への参加や外出、外食、ご家族との面会も制限せざるを得ない中、施設内でも楽しんで頂けるよう、季節を感じられるような行事を計画し、全員参加、活気ある生活が送れるよう心がけながら行っている。食事面では、管理栄養士を配置し、季節の食材を取り入れながらバランスの取れた食事を提供できるよう工夫している。衛生面では、毎日居室やホール、施設周辺まで清掃を行っており、環境整備に努めている。医療面では、訪問診療の医師、訪問看護師、施設看護師と連携し、看取りの対応を行っており、最後までお世話ができる環境づくりが整っている。

## 【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

飯塚市の幹線道路である国道から一つ道の中に入った場所にある「グループホームえだくに」は、近隣に大型ショッピングモールや病院、公民館やスーパー等、生活する場所としては便利な場所に建っている。2ユニットであるが平屋であり、採光が良く、玄関等は施錠をせずに開放感のある作りとなっている。管理栄養士を配置しており、また調理を専門に行う職員も配置しており、食に対して非常に力を入れている。食材も豊富であり、味は勿論の事、色合いにも非常にこだわっている。コロナ禍であっても、看取り介護には積極的に取り組んでおり、看取りの入居者の家族には、万全の感染対策を講じたうえで、面会が出来る体制にしている。嘱託医も夜間オンコール体制があり、必要に応じて往診出来る体制にある等、医療面でのバックアップ体制も整っている事業所である。

## V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～57で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
58	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:25,26,27)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない
59	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:20,40)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない
60	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:40)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:38,39)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
62	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:51)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
63	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごしている (参考項目:32,33)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
64	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:30)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
65	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,21)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
66	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,22)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
67	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
68	職員は、活き活きと働いている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
69	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
70	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない

自己評価および外部評価結果					
自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I. 理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	毎朝、全員で理念を唱和する事で意識する事が出来ている。日々の入居者様への支援の中で理念を共有し、実践につなげている。	毎朝の朝礼で理念の唱和を行っている。夜勤明けの職員が理念を読み上げて、続けて他の職員が一斉に読み上げている。全職員が理念を言うことが出来ており、理念が比較的浸透している。開設当初から唱和を実施し、各ユニットや台所に理念を掲げている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	新型コロナウイルスの流行により、地域の方々との交流が出来ない現状である。	町内会に加入していて回覧板が回ってきており、地域の情報が分かる様な環境にある。コロナ禍以前は、夏には地域の盆踊りに参加したり、地域の公民館で開催される敬老会にも参加をしていた。また以前は午前と午後に散歩に出かけて、地域の方と話す機会を持っていたが、現在はコロナ禍で散歩を含めた外出の実施を控えている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	新型コロナウイルスの流行により、認知症の人の理解や支援の方法を、地域の方々に向けて活かす場を設ける事が出来ない現状である。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	以前は、自治会長・地域包括・ご家族様に参加して頂いていたが、蜜を避ける為、現在は施設職員と利用者様のみで行っている。	コロナ禍以前は、自治会長、地域包括支援センター職員や入居者家族が参加をされていた。現在は運営推進会議の開催案内を自治会長、地域包括支援センター職員、入居者家族にもお送りし、話し合った内容(会議録)をお送りしている。今は面会は全くできない状況であるが面会の再開時期についての意見が一番多く寄せられているのが実情である。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	新型コロナウイルスの影響により、介護相談員の訪問が中止となっている。サービスを行う上で分からない事があれば、市町村の高齢介護課へ電話やメールで確認し、指導を受けるようにしている。	コロナ禍以前は毎月第1火曜日に介護相談員が来られて入居者からの意見を聞いてもたったり、何か入居者から意見が挙げれば事業所職員に伝える役割を担っていた。加算の変更届の件で、市に電話やメールで問い合わせをしたり、生活保護受給者が5名おり、市のケースワーカーから、入居者の生活状況の確認の連絡があったり等している。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束についての研修は施設内において定期的に研修を行っている。コロナ禍のため施設外での研修への参加が難しい状況だが、拘束しないケアに取り組んでいる。	事業所の玄関やユニットの入り口、居室の入口や居室から外に向けての窓も開放しており、施錠していない。身体拘束の研修は年2回実施している。外部研修に参加して、その資料を基に内部研修を2回実施している。全職員研修に参加出来ない場合は、議事録を全職員に回覧している。また身体拘束適正化委員会の内容を運営推進会議に諮っている。	

R3.9自己・外部評価表(グループホームえだくに)確定

自己	外部	項目	自己評価		外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	定期的に施設内での勉強会を行い、虐待防止に努めている。			
8	(6)	○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	定期的に施設内での勉強会を行い、理解を深めている。新人職員には難しい為分かりやすいように、工夫し説明している。	成年後見人が居る方が2名いる。2名とも弁護士が成年後見人として支援している。成年後見人とは請求書のやり取り等の金銭に関する事の相談や、書類のやりとり等で関わりがある。成年後見制度についての内部研修を年1回開催しており、研修実施記録が作成されている。	成年後見制度や日常生活自立支援事業のパンフレットを備え付けて、家族から問い合わせがあった際に説明が出来るようにしてはどうだろうか。	
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約また改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	本人、家族に十分な説明をし、納得した上で契約を行っている。改定等の際にも再度十分な説明を行っている。			
10	(7)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	年に3回開催している家族会が出来ない状況であるが、個々に出された意見・要望を聞き、柔軟に対応している。	コロナ禍以前は、年3回家族会を開催しており、入居者家族からの意見を頂戴していた。また、家族会の時に試食会の場を設けて入居者家族と一緒に昼ご飯を召し上がってもらっていたが、現在はコロナ禍で実施出来ていない。年6回の運営推進会議の会議録をお送りする時に一緒に家族会の資料を作成して入居者の生活状況が分かる様に工夫している。		
11	(8)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	月に1度のミーティングや個人面談の中で、意見や提案を聞き、皆で話し合う機会を設け反映させている。	2ユニット合同のミーティングを月1回開催した時や、年1回の職員個人面談を実施しているので、その際に意見を言う場が設けられている。入浴用具等や電化製品等の不具合や故障等、必要な物品に関しては、早く対応してくれるので、業務がしやすい状況である。		
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	個人面談において目標を設定し、やりがいを持って働けるよう、助言や職場環境等の整備をしている。また、処遇改善手当や賞与には、実績や努力が反映されている。			
13	(9)	○人権の尊重 法人代表者及び管理者は、職員の募集・採用にあたっては性別や年齢等を理由に採用対象から排除しないようにしている。また事業所で働く職員についても、その能力を発揮して生き生きとして勤務し、社会参加や自己実現の権利が十分に保証されるよう配慮している	年齢、性別、障害等関係なく働きやすい環境である。未経験者も採用しており、質の向上を図る為、入社後に資格取得に努めている。	20歳代から70歳代の職員が勤務をしている。介護休暇や育児休暇等が必要な職員は、必要な勤務調整を行い、勤務が継続出来る様に極力配慮している。新人で入った職員等、その職員のスキルによっては、1か月は日勤勤務をして、業務を早く覚えやすくする等配慮している。外部研修の参加は、勤務として参加している等、研修を受けられる様にしている。		

R3.9自己・外部評価表(グループホームえだくに)確定

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
14	(10)	○人権教育・啓発活動 法人代表者及び管理者は、入居者に対する人権を尊重するために、職員等に対する人権教育、啓発活動に取り組んでいる	定期的に施設内での勉強会を行い、人権教育、啓発活動に取り組んでいる。これらを活かしたケアプラン作成に努めている。	人権教育関係の資料を題材として内部研修を年1回実施している。研修参加にあたっては研修報告書を作成して提出している。コロナ禍以前は、人権教育関係の外部研修に参加をしていたが、事業所にZOOM環境がなく、外部研修には参加出来ない実情がある。	新型コロナウイルス感染症が落ち着き、外部とのやりとりが可能になれば、「福岡県講師団講師あっせん事業」を利用して、外部講師による人権学習の機会を持ってみてはどうだろうか。
15		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	外部の研修に参加する事が難しい状況ではあるが、月に1回の全体研修で、内部研修として情報の共有を行っている。		
16		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	新型コロナウイルスの影響により、他事業者様との対面での意見交換は難しい状況だが、電話での相談や情報交換等を継続している。		
<b>II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
17		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	初回アセスメントの段階で、入居者様の不安や情報に耳を傾け、納得し安心して過ごして頂けるよう、努めている。		
18		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	初回の相談の段階で家族等が困っている事や不安に思っている事、要望に耳を傾け、信頼関係づくりに努めている。		
19		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	サービスを導入する段階で、必要としている支援について再確認し、他のサービス利用も含めた話し合いを行っている。		
20		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	日々の生活の中で、入居者様が出来る事を見つけ、職員が支援する事で、達成感を共有できるように支援し、関係を築いている。		
21		○本人と共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	ご家族へは、毎月の通信や電話での状態報告を行い、家族と共に本人を支えていく関係づくりに努めている。		

R3.9自己・外部評価表(グループホームえだくに)確定

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22	(11)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	ご家族様との外出・外泊・面会が自由に行えない状況ではあるが、電話にて会話をしたり、タブレットによるビデオ通話により関係が途切れない様、支援に努めている。	コロナ禍以前は、お盆やお正月には家族と外出や外泊をされたり、時には外食に行ったりしていたが、現在はコロナ禍でご遠慮して頂いている。他にも近所の知人や教え子が面会に来られていた。以前事業所に勤めていた職員が顔を見に来たりしていた。葉書のやりとりもあれば、タブレットを使用しての面会を実施しており、コロナ禍でも家族等との関係が途切れないように配慮している。毎月「えだくに通信」を作成して、今の生活状況を家族に発信している。	
23		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	レクリエーションや施設内行事を通じて、利用者様同士が関わり合えるよう心掛けている。また、利用者様同士の関係性を把握し、トラブルがないよう配慮している。		
24		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	契約終了後も、相談の電話や訪問は受け付けている。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
25	(12)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	日々の生活の中で、入居者様の意向に耳を傾け、職員全員で共有し、把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している。	入居者様がご自身で要望を表出出来る方であれば本人にお聞きしたり、家族に今までの生活状況をお聞きして、何をしたいか等の要望をお聞きするようにしている。入居時は本人や家族だけではなくケアマネジャー等、介護サービス事業所職員にも情報を収集して、本人の生活状況等を把握しようと工夫をしている。	
26		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	本人や家族にこれまでの生活歴や生活環境を尋ね、ひもときシート等を活用してサービス利用の経過等の把握に努めている。		
27		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	日々の生活の中で、気付きをもって接する事により、現状の把握が出来、職員全員で共有している。		
28	(13)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	本人、家族、職員、必要な関係者からの意見をもとに現状に即した介護計画を作成している。	ケアプラン作成については各ユニットの計画作成担当者が作成をしている。アセスメント、サービス担当者会議の招集や会議録の作成、ケアプラン作成、モニタリング等ケアマネジメントの一連の業務は、全て計画作成担当者が実施している。ケアプラン更新時等は家族にケアプランの変更について何かご希望がないかを電話にて確認している。	運営推進会議の開催案内や家族会の開催案内を送付する時に、ケアプランについての意見がないか書面で確認してみてもどうか。  施設サービス計画書第2表のサービス内容について、現在実施している介護内容をより具体的に記載してはどうか。

R3.9自己・外部評価表(グループホームえだくに)確定

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	個々の記録を作成しており、その記録を職員間で共有し、介護計画の見直しに活用している。		
30		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	その時々ニーズに対応できるよう、職員間で連携して柔軟な支援に努めている。		
31		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	職員全員が地域住民、自治会の活動、ボランティア、消防署等の支援を把握し、新型コロナウイルス終息後は、一人ひとりが安全で豊かな暮らしを楽しむ事が出来るよう支援していきたい。		
32	(14)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるよう支援している	月に2回の訪問診療や状態に応じて往診など、利用者の状態報告や他病院受診の結果報告を行い、適切な医療を受けられるよう支援している。	在宅生活をされていた頃にかかっていた在宅医に受診を継続されている入居者もいる。その際の受診支援は事業所がしている。また家族が同席出来る場合は同席をお願いしている。嘱託医は24時間体制であるため、必要時は夜間でも嘱託医に電話連絡して必要に応じて往診をしてもらえる体制がある。	
33		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	介護職員は、日々の生活の中での気づきを訪問看護師に報告している。個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるよう支援している。		
34		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	本人、家族、職員、かかりつけ医と連携し情報共有を行っている。退院後もADLの回復に向けて情報交換や相談に努めている。		
35	(15)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入居時に説明を行っているが、重度化した場合には再度説明している。かかりつけ医とも十分な話し合いを行い、本人と家族の意向を尊重し支援に取り組んでいる。	入居時に、重要事項説明書の中に盛り込んでいる「看取りに関する指針」や「重度化した場合における対応の指針」に基づいて事業所の看取り体制の説明や方針を十分に説明し、書面にて同意を得ている。また看取りの段階になった際は、嘱託医と家族とで直接お話してもらい理解が得られる様にしている。	

R3.9自己・外部評価表(グループホームえだくに)確定

自己	外部	項目	外部評価		
			自己評価 実践状況	実践状況 次のステップに向けて期待したい内容	
36		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	消防署主催の研修やAEDの使い方の訓練を受け、緊急時の対応や実践に努めているが、昨年以降コロナ禍の為行われていない。		
37	(16)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年間を通して、火災避難訓練、水害時の避難訓練、地震想定訓練、防犯訓練等を行い、利用者が安全に避難できる方法を職員全員が身につけ、実践できるよう努めている。また、地域の方との協力体制も自治会に加入し、出来ている。	火災訓練は年1回日中想定で実施している。コロナ禍以前は消防署の立ち合いもあり、講評をもらっていた。また、地域の方々にも災害時には避難のお手伝いをして頂ける様に声掛けを実施している。米と水、缶詰の備蓄をしている。火災訓練以外にも、事業所の目の前の川の氾濫を想定した訓練(水害訓練)や地震想定訓練も実施している。	火災訓練については、日中想定だけではなく夜間想定訓練も実施してはどうだろうか。
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
38	(17)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	個々の人格を尊重し、自尊心を傷つけない様、言葉かけを工夫している。	接遇についての内部研修を実施した事があり、その中で言葉遣いや言動について学ぶ機会を持っている。実際に職員が入居者に対して不適切な言動を行った時は職員にその場で注意をして改善を促したり、後で申し送りノートに書いて指導をする様にしている。	
39		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	日々の支援の中で、希望を言いやすい環境づくりを行い、どんな場面でも自己決定が出来るように働きかけている。自己決定が困難な方には家族に尋ね対応している。		
40		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	個々のペースを大切に、その方にあった生活が送れるよう心掛けている。		
41		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	清潔保持に配慮し、本人の着たい衣服を選んでもらっている。季節に合った衣服を選ぶことが出来ない方にも身だしなみやおしゃれができるように支援している。		
42	(18)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	美味しく食事が出来るよう、管理栄養士と話し合いながら献立し調理している。また、一人ひとりの体調に合わせ、減塩食やミキサー食も提供している。準備や後片付けが一緒にできる利用者は少ないが、おぼん拭きやテーブル拭き等出来る範囲で行っている。	魚と肉は地域の業者に発注して配達してもらっている。米や野菜、調味料等配達以外の食材は職員が買い出しに行っている。調理は管理栄養士や調理をする職員がおり、それらの職員が主となって調理している。コロナ禍以前は入居者と一緒に買い出しに行ったり外食したりしていた。行事の際はテイクアウトを利用して外食気分を味わう等工夫をしている。入居者にはテーブル拭きやお盆拭きを手伝ってもらっている。	

R3.9自己・外部評価表(グループホームえだくに)確定

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	個々の体重、身長、運動量、既往歴、健康状態を参考に看護師・管理栄養士・かかりつけ医に相談しながら支援している。		
44		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、口腔ケアを行っている。介助を要する方はスタッフが行き、口腔内を清潔に保てるように支援している。		
45	(19)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	個々の排泄パターンを把握し、排泄の失敗がないよう、声かけ等を行っている。排便については、かかりつけ医と相談しながら内服薬等で排便を促し、トイレで排泄出来るよう支援している。	排泄チェック表を記載することで排尿や排便のタイミングをつかみやすくしている。また、排泄チェック表を活用して排尿の間隔が分かり、尿取りパットの交換が少なくなったり、失禁が少なくなったりした事がある。排泄は夜間の睡眠状態にも関係しているため、夜間の排泄間隔には特に気を付けている。	
46		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	運動が出来る方は、運動により腸を動かし排便につながるよう支援している。また、かかりつけ医に相談しながら水分量の調整や腹部マッサージを実施している。		
47	(20)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	週3回の入浴日を決めているが、本人より入りたくない等の訴えがあれば、時間を改めて再度声かけをしてみたり、それでも嫌なようであれば、別日にする等の配慮を行っている。	週3回入浴介助を実施している。入浴時間は概ね午前中で対応をしているが、どうしても入浴をたくない入居者がいた場合は、入浴の曜日や時間を変更して入浴の機会が得られる様に対応している。また、心身状態の面で入浴が難しい方は、清拭にて対応をしている。入居者の好みに合わせて何種類か入浴剤を準備して、入居者の好みの入浴剤を使用している。	
48		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	個々の体調や気分に合わせて自室で休息出来るよう、支援している。		
49		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	アセスメントの段階で、既往歴や内服薬についてケア会議を行い、情報の共有、把握に努めている。また、内服薬の変更時は副作用も含めて状態変化に注意している。		
50		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	一人ひとりがやりたい事が出来るよう、スタッフが見守りや声かけを行いながら、張り合いや喜びのある生活が送れるよう支援している。		



R3.9自己・外部評価表(グループホームえだくに)確定

自己	外部	項目	外部評価		
			自己評価 実践状況	実践状況 次のステップに向けて期待したい内容	
51	(21)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるよう支援している	コロナ禍のため、外出する事が困難であるが、終息後には、外食やショッピングを楽しんだり個々の希望に沿えるよう支援したい。	コロナ禍であるため、現在はドライブや近隣の散歩も含めて外出を控えている状況である。コロナ禍前は、近隣のショッピングモールに買い物に出かけたり、花見やコスモス、山笠を観に行ったりしていた。地域の夏祭りにも参加をしていた。事業所開催の桜まつりやクリスマス会を毎年開催して多くの家族が来られていたが、現在はコロナ禍で実施していない。	
52		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	認知症の為、金銭管理については困難である方が多い。		
53		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	本人が希望する場合は、電話をかける事が出来るよう支援している。また、手紙については、認知症の為字を書くことを忘れている方が多い中、レクリエーションの一環として習字を行い、書くことを忘れないよう支援している。		
54	(22)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	共用空間においては、清潔を保ち、季節感のある飾りつけやカレンダー、入居者が作った作品を飾っている。温湿度管理や定期的な空気の入れ替えをする等、居心地よく過ごせるよう工夫している。	ソファやテーブル、イス、テレビ、行事の際の写真や入居者が作成した作品や、敬老会の際の感謝状、誕生日の際に作成したバースデーカード等が共用空間に飾ってある。各ユニットにトイレが2か所、洗面所が2か所設置している。室内は音楽がかかっており、時にはソファに座って寛げる空間である。	
55		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	ホールにはソファや広いテーブルを設置し、気の合った利用者様同士でテレビを観たり、会話が出来るよう工夫している。		
56	(23)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	ベッド以外は、自宅で使用していた馴染みのある物を安全を考慮しながら配置し、家族や大切な人の写真等も飾っている。	入居者の心身状態に応じて木製ベッドや介護用ベッドが置いてあったり、筆筒、カーテン、収納庫、エアコンを設置している。自宅で使っていたベッド等家具を持ち込んで使われている方もいる。自宅から持ってきた家族写真やぬいぐるみを飾っている入居者もあり、入居者の好きなレイアウトで生活をされている。	
57		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	ホールを中心にトイレ・洗面所・浴室に行きやすいように配置している。利用者が分かりやすいように名札を付けたり、自由に移動できるように手すりを設置している。		